

慶長時代の基督信者の墓碑(島田貞彦氏)考古學雜誌(八)

(三)

慶長年間の京都耶蘇信徒の墓碑(新村博士)本誌(三ノ一)

京都帝國大學考古學研究室發行繪葉書(第三輯)

批 評

James Bryce — South America, Observations and

Impressions.

ジエームス・ブライス即ち今のデクモント子爵の著せる此書は最初一九一二年即ち同氏が南米旅行を終りて後幾もなく公にせられ、翌一九一三年には早くも其第二版を出し一九一八年に至りて更に版を重ね訂正増補を施したものである。北海岸の諸邦のみは旅程のうちに含まれて居らず、従つてそれに關する觀

察も述べてないけれど、普通に人が南米に就いて知つてよい事は率ね書中に委くしてあり秘魯ボリ非アに關する考古談からアンデス横斷鐵道、マジエラン海峽の廻航など、旅行記として興味津々たるものである。されど予は今其書の全般に涉りて之を批評しやうといふのではない。書中所々に見えるブライスの南

米國民論に就き予の目撃せる所に照して短評を加へ、併せて南米研究者に此好著を紹介せむとするのである。

南米諸國の將來は如何なるものであらうか。これは大なる疑問である。ブライスは其觀察印象記の卷頭に於て、己れの意見の樂觀に傾くことを先づ前觸れしつゝ、A. B. C. 三國即ち亞爾然丁と巴刺西と智利とは、既に蔚として國民を形成した。爾餘の諸國に至りては、未だ此三者程の域には達せぬけれど、國民となるべき徑路を、屢々として進みつゝあるものだと斷言し、國民の定義から説き起こして數多の例證を擧げ論じて居る。ブライスの政論の概して樂觀に傾くことは、其名著なるアマリカン・コムモンエルスに於ても明かに發露されてある通りで、それが爲めに其所説の價値を減ずるところか、却りて人をして益々傾聽せしめるものである。樂觀に傾くといふのは畢竟するに觀察

者が其觀察の對象たるものに向ひて同情を注ぐことを忘れぬからで、これは誠に結構なことだ。ブライスの南米觀察印象記も其樂觀の故を以て南米研究者必讀の書たるを失はぬこと勿論である。

然しながら予は彼の所論に對し一々賛同を與ふることは少しく躊躇せざるを得ない。彼は國民なる語に定義を與へて、それから論を進めて居るが此國民といふ語ほど多様に解釋の下される語はない。完全に獨立したる國家をなさずとも加拿陀人の如きは既に自ら國民と稱し、エルサイユ講和條約に於ては獨立國民を以て待遇されて居る。又今こそ他力によりて、即ち列強のお蔭で獨立を回復したが、其以前は一世紀餘りも國家の獨立を失つて居つた彼の波蘭人の如きは、其國のなかつた長い間も一個特立の國民を以て自ら標榜しつゝ居り、他國民も亦毫も之を怪むことをなさなかつた。將たまた現に獨立國家を成して居らず、過

去に於ては僅に頗る如何がほしい國家を成したに過ぎぬ愛爾蘭人に對してすらも、一般に國民の稱呼が用ゐられて居る。若しブライスの與へた國民なる語の定義にのみ準據して、それで以て事が濟むならば、これ誠に簡單至極で予も直ぐ彼の結論の賛成者の一人とならうけれど、此の如く勝手に下した定義から出發する議論はどんなに論理にかなつたにせよ、畢竟するに獨りよがりにも終るもので、融通はきかず。若し之を移して他の邦國を論じ、他の民族を評せむとするに當りては、必や大に修正を加へなければならぬものである。限りある範圍にのみ通用する定義を提げて、以て南米諸國の現況と將來とを説き、それだけが既に國民を成し、それだけが、將に國民を成さむとしつゝあるなど、説いた所じ、それが果して幾何の裨益を讀者に與へるであらうか、疑はしきものである。

現に獨立の國家を維持しつゝあると否とに拘はらず、國民といふ語の今日の通義は國家といふ語と離れ難い關係を有して居る。故に曾て獨立を喪失した國民は其國家を回復しやうと努力し、既に事實上の獨立をなし得た集團は其民族的構成の如何を論せずして、國民と稱する事を名譽とする。或は又此の如き曖昧を避けむとして、戦前の獨逸の政治學者等の如きは、國民的國家論をなし、其國の住民中主なる要素をなす一民族の力を以て、同一國內の他民族を壓服し、之を同化しなければならぬと主張した。而して見事に失敗した。失敗の結果は彼等の欲したるよりも小さい範圍に於て純一民族から成ると云つても先づ差支のない國民的國家なる獨逸共和國が出來た。同化政策の成功に至りては、遂に之を見るに及ばずして、アルサス・ロルレインは佛蘭西に取り戻され、波蘭は獨立國となりて、大部分其治外に立ち、北部シユレ

スキツトは丁抹に復することゝなつた。國民的國家の建設に於て、理論からは成功したとも云へやうが、實際は思惑ちがひの成功を収めたのである。

論は少しく岐路に入り過ぎたが、ブライスが南米に於て既に國民となりおふせたと評して居るものゝうちで、最も尙武國だといふ評判があるのは太平洋に瀕した智利であるが、これは予の目撃した範圍外であるから、今暫く之を措かう。大西洋側に位置する亞爾然丁にせよ、伯刺西にせよ、兩國いづれも其住民は、單一種族から成り立ち居るのではない。前者に於ては西班牙人、後者に在りては葡萄牙人が、それ〴〵中堅民族を成して居るとは云ひながら、其以外に多數の歐洲諸國民も居る。インデアンもある。伯刺西には黒人も居る。又此等諸民族の雜種兒も南米には極めて多い。されば其人種構成の複雑なること獨逸舊帝國などの

比ではない。然るに獨逸の帝國政府が其國內の異民族に對して施した同化政策は、帝國の存在中途に其成功を見ず、今は甚だ不評判のものとなつた。南米諸國は恐らくは前車の覆轍をふむことをしないであらう。のみならずやらうとした所で、それには獨逸が曾て遭遇したよりも、更に多くの困難を見ねばなるまい。舊獨逸帝國にありては、兎に角倫を絶して有力な獨逸人といふものが中堅となつて、以て異民族に臨んだのであるけれど、亞爾然丁、伯刺西、兩國に於ける西班牙人や葡萄牙人の境遇は、それと少しく相違がある。彼等はそれ〴〵の國家に於て、比較的多數を占め、土地を所有し、政權を把握する所の民族である。歴史的に中堅民族である彼等は、今後も永く其中堅民族たる資格を失ふことがあるまい。然しながら此等の諸國が南米名物の革命の跡を絶ちて、急にブライスの所謂蔚たる新國民となりおほせたのは、其根

本たる中堅民族即西人や葡人の力のみではない。寄生諸民族の働きが興りて多きに居る。而して此等西葡以外の諸國民は、二十世紀の今日、コンキスタドレスとして彼等に臨まんが爲に、遙々本國から渡來したのでもない。中堅民族と競争して政權の獲得に熱中するまでもない。其欲する所は貨殖に存するけれども、必しも地主たらぬことを要求するでもない。故に中堅民族たる西葡人の勢力は今尚ほ牢固であるのだ。けれども南米諸國が今の如き活氣を呈し、都市は益々隆昌となり、ブエノス・アイレスガ二百萬の人口を有するに至つたのは、其殊功専ら中堅民族に歸すべきでないとするればA. B. C.の三國を以て既に蔚たる新國民を形成したものだとした所で、予は其意を解するに苦む者である。北米合衆國は雜然として幾多民族の寄り所帯であるが、然かし其中堅たるアングロサクソン民族が全體に興へて居る印象は顯著なもので

而して此印象あるは、即ち米國の今日の進歩ある所以である。同じく中堅民族でも南米の西人葡人は北米合衆國に於けるアングロサクソンと其趣を異にして居る。南米諸國は現在の關係を組成諸民族の間に持續しながら、尙ほ將來に於ても其發達を加へるだらう。ブライスの所謂蔚たる新國民の數は増すであらう。然しながら眞面目に南米の國民論に深入りする前に、其國民論と離るべからざる關係ある南米の國家なるものを精査する必要がある。舊大陸に於てすら、國家に就いての見解が區々であるが、然かし其間には共通の點がある。史家若し南米の國家を研究したならば或は意外な發明をなし、ブライスの下せる國民の定義すら、之を適用して論を立てた所で、何の詮もないことを覺る時が來ぬとも限らぬだらう。〔原勝郎〕